

ねじりはちまき

6月 水無月^{みなづき} 芒種 夏至の月になりました。

6月1日衣替えです。6日芒種、11日入梅、19日父の日、21日夏至となっております。6月1日からは制服のある学校や会社では冬服から夏服に変わります。

もともとは宮中に伝わった行事で季節ごとに衣服を替える習わしが、今に残ったものです。和服ではこの日から単衣を着ます。現代では衣替えにこだわる家庭や人は少なくなりましたが、夏の到来を感じます。

コロナの感染者も大分少なくなっはきましたが、まだまだ油断は出来ません。暑い夏を迎えるためにも健康には大いにお気を付けください。

幸田 常一

<会社近況>

震災での災害復旧工事も進んでおりますが、相変わらず弱い揺れの地震は頻度が多いので、前回の震災で弱くなってしまった箇所は注意が必要です。

心配な箇所などありましたら、当社までお問合せ下さい。

その他の現場では本宮市の増改築の工事をお世話になっております。

<お家の点検> カビ対策編

雨の多い季節ですので、簡単なお家のカビ対策を紹介します。

- こまめな掃除 (カビはホコリ、食べ物のカスなどを栄養源とし増殖します。)
- 換気 (お部屋の湿度が調整され、湿気もこもりません。)
- 湿度を下げる (上記と関連してきますが高温多湿はカビの好物です。)
- 風通しが良くなる家具のレイアウト (窓をふさがない家具の配置等)

空気がよどみなく流れるように、大きな家具の配置がポイントになるそうです。普段、掃除しない場所もホコリがたまっているかもしれません。この機会にこれらの簡単な対策や、点検でカビの予防をしてみたいはいかがでしょうか。

<6月の花>

6月に咲く主な花は、シロツメクサ、水芭蕉、月見草、ユリ、あじさいなどです。花はリラックス効果があると考えられているそうです。香りや、きれいな色、花や葉が風に揺れる音などから、心を落ち着かせる効果も癒しになるようです。特に雨が多く、あたたかい季節なので道端の草木が潤っている様子も癒しになるかもしれませんね。

令和4年6月5日発行

有限会社 幸田建設

<発行責任者>幸田久美

〒969-1204

本宮市糠沢八幡 1-1

電話 0243-44-3816

<後記>気温も上がりマスクが苦しく感じる

季節になりました。こまめに水分補給が必要

ですが、いつの間にか忘れてしまったりと、

意識的に補給が大切ですね。うがい、手洗い

水分補給の三拍子で暑さを乗り切りたい

ものです。

(ほしの)

登山家・冒険家植村直紀について

今回は登山家・冒険家植村直紀のことについて取り上げてみたい。なぜ植村直紀について取り上げるのかだが、登山家・冒険家が好きだからということではない。植村が言ったとして伝えられて言葉が気になったからである。それは、「何でも金で買えるという世界から離れて、遊びや楽しみでもいいから、自然の中で原点に帰ることが人間として必要である」と。どうも植村は人類未踏の山や極地を自分で征服することばかりを考えていたのではなかったようだ。つまり、植村には登山や冒険を為すに当たって”自然と向き合う哲学”めいたものがあつたように窺えるのだ。その一端をお伝えできればと思い、筆を進める。

先ず、登山家としての植村の業績を辿ってみよう。

- ①1966年：モンブラン単独登頂（ヨーロッパ大陸最高峰）
- ②1966年：キリマンジャロ単独登頂（アフリカ大陸最高峰）
- ③1968年：アコンカグア単独登頂（南アメリカ大陸最高峰）
- ④1970年：マッキンリー単独登頂（北アメリカ大陸最高峰）
- ⑤1970年：世界最高峰エベレストに日本人で初登頂（日本山岳会遠征隊員として）

以上により植村は、世界初の五大陸最高峰登頂者となる

- ⑥1984年：マッキンリー冬季単独登頂（世界初） *43歳・消息不明となる

次に、冒険家としての植村の業績を辿ってみよう。

- ①1968年：アマゾン川6000Km単独筏（いかだ）下り
- ②1971年：日本列島3000Km徒歩縦断 *グリーンランド単独行の準備
- ③1972年：グリーンランド北端でエスキモーと共同生活
- ④1973年：グリーンランド3000Km犬ぞり単独行
- ⑤1974年~76年：北極圏12000Km犬ぞり単独行
- ⑥1978年：犬ぞり単独行で北極点到達
- ⑦1978年：犬ぞり単独行でグリーンランド縦断
- ⑧1982年：南極大陸単独犬ぞり横断（3000Km）の挑戦断念

よくもまあ、次々と挑戦し続けたものである。植村本人の言葉として遺っているのは、「何か新しいことをやるのが冒険である」と。冒険して止まない気持ちが彼を突き動かし、挑戦へ駆り立てたのであろう。でも我々からみると、想像を絶する類まれな行動力である。

ここで植村の人となりについて若干触れたい。彼は身長が162cm、小柄でずんぐりとした体型、写真から見てとれる（インターネットで見て欲しい）愛らしい笑顔は冒険家のイメージのそれとかけ離れていると評される。しかし、その笑顔の奥底に単独で、世界初の冒険をやり遂げる強じんな精神を持ち合わせていたのである。植村が登山を始めたのは明治大学山岳部に入部してからである。山のことも良く知らず、軽い気持ちで入部したらしい。ところが余りにも厳しいのに驚いて何度も退部を考えたというが、退部はしなかった。やがて、3年生のころになると年間130日も山に入るようになったのである。

ところで、植村には彼なりの「冒険スタイル」があるという。伝えられているものとしては、冒険する現地で長時間過ごして、いわば”生活順化”することから始めるという点である。順化とは、冒険先の異なる環境に適応できるようにすることである。有名な話としては、1973年のグリーンランド犬ぞり単独行に先立ち、前の年に約五ヶ月間、グリーンランド北端で共同生活をし、衣食住や狩り、釣り、犬ぞりの技術に至るまで、極地に暮らす人々から直に学ぶことに努めたのである。ギャビックという伝統的な漬物（海鳥をアザラシに詰め込んで作る）は強烈な悪臭で知られるが、それも好物にしてしまったとう。実際単独行では、釣りと狩猟で得られた生食と脂を中心にし、持参の紅茶とビスケットで補完するという食生活を貫いたのである。これに加え、大変だったのは、犬の扱いだったようだ。10頭前後の編成になるが、犬を主人に完全に服従させるまでの訓練を積みねばな

らないし、また犬の食糧の確保（アザラシの狩猟）が大きな仕事であった。単独行ではそれを自分一人でやらなければならない。そこまで覚悟し、準備周到にして単独行を行ったのが植村なのである。単独行は植村の冒険スタイル（登山も）である。でも何で単独行にこだわったのであろうか。単独で成し遂げれば業績としては独り占めでき、複数・団体より評価として際立つことは間違いないが、単にそれを狙ってのことだったのだろうか。組織への献身、他者への気遣い、控えめな行動、こうした植村の特性が阻害されることなく、単独で行動することで自らに内包された呪縛から解放されると考えたと評する人もいる。「冒険は他人のためにするものでなく、誰からも左右されることなく、自分の意思ひとつで行動できるのが単独行」という植村の言葉があるが、この辺にヒントがあるかと思う。また、「冒険とは生きて帰ること」と言っていた植村は、前人未踏の地で万が一他を犠牲にするようなことがあってはならないと考えての単独行であったかも知れない。

また、単独行の場合資金面の調達が大変であったろうと思うが、その点はどのようにしたのか。資金調達についてはエピソードがある。最初モンブランに挑戦しようとした時のこと。その資金稼ぎに何とアメリカに渡ったのである。カルフォルニアの果実農場で働くが、いわゆる不法就労者である。その取り締まりに捕まるのであるが、冒険資金を稼ぐためと告白したら取調官も感動して日本へ強制送還をせず、すぐモンブランに行くようにと放免してくれたという。こうと決めたらすぐ行動に移してしまう植村の逸話である。しかし、冒険の計画が大きくなるにつれ費用も膨れ上がる。植村は悩みながらもスポンサーを付け、その都度何とか金を捻出した。北極点冒険の時には、テレビ対談や講演会の出演、そして賛同者からカンパを募ることまでしたのであった。これは冒険に付きまとうものであった。

さて、植村が北極点やグリーンランドの北極圏に冒険の舞台を移した時、あることが植村の意中であつたのである。それは南極であつた。北極圏冒険は植村にとって南極への準備であつたのだ。植村は南極大陸犬ぞり単独横断を最終目標にしていたのである。その南極の地を踏んだのが北極圏冒険から4年後であつた。その南極横断はどうであつたのか。それは悲しい結末を迎えた。実は植村の世界的名声に答え、アルゼンチン基地が協力を申し出て、同軍が食料の空輸の協力してくれる手はずとなった。それが手はず通りいかなくなってしまったのだ。折悪く、その頃イギリスとアルゼンチンの間でフォークランド諸島の領有を巡って紛争が勃発したのである。そのため、軍としては協力しかねるようになったのである。植村としてはアルゼンチン基地で希望を捨てず待ったのだが、非情な通告が待っていた。植村の南極滞在は10ヶ月に及んだが、成果を挙げず、無念の帰国となった。

失意のうちに帰国した植村はその後どうしたのか。すぐにまた動き出すのである。南極冒険の後に「冒険学校を作りたい」と言っていたのだが、それに取り掛かろうと、アメリカのミネソタ野外学校に赴くのである。極寒の地で学生とともに、雪にまみれての訓練をするとともに、植村にはもう一つの狙いがあったようだ。それはアラスカ・マッキンリーの冬季単独登頂である。そのために、その地の極寒に慣れておこうとの準備である。その後間もなく冬季単独登頂は敢行される。そして世界初の冬季登頂を成し遂げる。だが、悪天候のため、植村は帰らぬ人となってしまった。消息不明である。1984年2月12日の日である。その日は植村が43歳の誕生日であつた。後で発見された植村の日記の最後には、「何が何でもマッキンリーに登るぞ」と書かれていたという。

植村が消息不明となってから、その意思を継いで北海道の帯広市に帯広野外学校が建設された。植村が次世代の子ども達に伝えたかったことが、様々なメニューの自然体験を通して確かに伝えられていることであらう。植村の遺体は未だ発見されていない。今回はこれで終わる。

佐渡島 霧と風の大佐渡山地縦走 金北山

【山の概要】

金北山（きんぼくさん、日本三百名山、1172m、新潟県佐渡島）

【日程概要】5月27日（金）から29日（日）の2泊3日

この山は自分にとって、東北6県と新潟県の日本三百名山で残っている最後の山だった。「花の百名山」でも注目されていて妻も行ってみたくて言っていたので5年前に資料を取り寄せて山行のタイミングを計っていた。

4月下旬の笈ヶ岳山行が厳しかったので、息抜き山行をしたかったこと、また観光も取り入れて奥さん孝行もしたかった。たまたま県民割の期限が迫っていたので急遽、5月27日からの2泊3日の日程で出かけることにした。

初日はドンデン山荘に泊まり翌日早朝から縦走を始めることを考えたが、27日（金）には宿泊の予約が取れなかった。28日（土）は大丈夫ということで、ドンデン山荘の宿泊が最初に決まった。ここも県民割の対象施設だった。いろいろ検討した結果、佐渡汽船の勤めるフェリーと椎崎温泉の旅館一泊の組み合わせ「佐渡浪漫紀行マイカープラン」を利用することにした。

5月27日（金）

自宅を6時過ぎに出発。十分時間的な余裕があると思ったが磐越道の途中から雨が降り始め、新潟中央ICを下りたら出勤時間帯と重なってしまった。8:40新潟港に着き佐渡汽船フェリーの受付時は土砂降りの雨になった。窓口で県民割一泊分のクーポン券（2,000円×2人）を貰う。

2等船室大広間の窓際に場所を取る。9:20出航。

到着30分前に放送があり、デッキに出てみると雨は降ってなく晴れ間も見え、翌日登る大佐渡山地最高峰金北山が中腹に雲をたなびかせて港の背後に鎮座していた。（写真左）



両津港に11:50着、下船。港の商店街は朝6時か7時頃と錯覚するほどのシャッター通りだった。お昼はパンフレットに載っていた港近くの寿司屋にナビで直行した。背広姿の客で混んでいたがなんとか

カウンターに座れた。握りのランチはパンフレット写真とは違い980円の値段相当のものだった。自分も妻も佐渡は2度目だったが土地勘がないのでまずは当夜宿泊する港から車で10分くらいの椎崎温泉の旅館に行く。

ナビの目標などを聞き、当日の大体のコースを決める。道すがら若宮神社のところで「北一輝」の看板を見つけた。佐渡は北一輝の生誕の地であることを思い出したがパンフレットには書いてなかった。時間があれば後で寄ることにする。

まずは、翌日の縦走出発地でもあり、翌日の宿泊地でもあるドンデン山荘に向かう。舗装路の道は上部に行くにしたがってカーブが多く急坂になり、タクシーや数台の車とすれ違う。30分くらいで着いた山荘は標高890mのところにある(写真下)。



山荘の女性スタッフが翌日の天気予報を調べてくれて、天気は良さそうだが、風が強く風速16m/sの予報とのこと。稜線でも樹林・灌木地帯は大丈夫だが、樹木のないところでは日本海側からの風が強く飛ばされるほどの強風の場所が続くとのこと。滑落するようなところ

はないが十分気を付けるようにとのことだった。引き返す人たちも多いらしい。

貰ったトレッキングマップに強風の区間を書き込む。「ツンブリ平～天狗の休場」所要時間は1時間15分。

次に縦走後の下山予定地の「白雲台交流センター」を目指す。いったん両津港まで下りて大佐渡スカイラインに向かう。雲のない青空には金北山の両側の縦走路の山並みがくっきりと見えている。航空自衛隊佐渡分屯基地の通信施設(ボックス型のアンテナ)も山頂と白雲台に近いところに見えている。山荘から約1時間で白雲台に着く。翌日はこの逆コース、白雲台からライナーバスで両津港まで戻り、タクシーで山荘に向かうことになる。マイカーでの縦走の場合は無駄が多いが仕方がない。



交流センターでは軽い食事もできる。ソフトクリームを食べながら、外のデッキから下界を見下ろす。右手に真野湾(写真右)と左手の両津湾(写真左)とは

近く 17 kmしか離れていないとのこと。両津湾の手前には新潟県最大の加茂湖が見える。真野湾と両津湾の間が国仲平野で水田が広がっている。平野は思ったよりは狭く感じた。施設から佐渡おけさの歌が低く流れている。

♪～ハー佐渡へ (アリヤサ) 佐渡へと 草木もなびくヨ

(ハ アリヤアリヤアリヤサ)

佐渡は居よいか 住みよいか (ハ アリヤサッサ) ～♪

下山口となる自衛隊基地内の道路の出入り口の看板に「ロープを外して通って下さい」と表示されている。かつては基地の了解を得る必要があったが今は山荘などに登山届を出すだけで良くなった。

15 時前に下山してきた登山者に聞くと、8 時にドンデン山荘を出発し、初めに少し雨に降られただけで晴れの素晴らしい景観だったとのこと。千葉県の柏市のグループで若いガイドさんと熟年の男女 6 人だった。ジャンボタクシーが待っていた。

妻は土産物を買っていた。白雲台からの佐渡観光を十分堪能し傾斜と屈曲の多い大佐渡スカイラインを西の相川に向けて下る。佐渡金銀山の施設は前に来たことがあるのでパスし、相川市街地には入らずに両津の旅館を目指す。国道 350 号線沿いは心なしか両津港のシャッター街よりも繁栄している感じだ。途中、翌日の昼食のパンと飲み物を購入する。

宿の近くの北一輝の文字を見かけた若宮神社に寄る。歌碑 (※) があつた。

みえずみ江ず なる人かげを みおくりて
逢われん思 あはれぬ思 輝次
いなみかね かへしせむとて 筆はとれど
あけの袖口 ただかみてのみ

(※) 北一輝が 19 歳で離島上京の明治 34 年の歌誌「明星」(与謝野鉄幹主宰) 第 11 号に投稿採用されたもの。隣村・原黒の同業の造り酒屋の娘・松永テルとの恋の歌。この恋は実らなかった。これ以降「明星」に短歌を発表することはなかった。[案内板設置者 NPO法人みなと昭和館]



神社の戸締りの人が来たので話しかけたら、北一輝の墓への道順を教えてくれた。2～3 km進んだところで散歩中の熟年男性にも聞いたら、案内してくれることになり車に乗ってもらった。田地から道路を挟んで小高い畑地の脇が墓地になっ

ていてその一番奥に北一輝の墓があり、両津市教育委員会の説明版 (※) があつ

た。(写真前ページ下)

(※) 明治十六年、両津市湊に生まれる。二十三歳で「国体論及び純正社会主義」を出版して注目をあびる。その後中国にわたって革命に奔走。主著「日本改造法案大綱」は国家主義運動の経典となり、二・二六事件の首謀者とされて昭和十二年処刑される。その後昭和二十一年の大赦令により赦免となった。と記されている。享年 55、法号「経国院大光一輝居士」

椎崎温泉の宿には 18 時ごろ着く。宿は加茂湖の東に面していて湖の向こうに翌日登る大佐渡山地の山並みが見えている。山の上部は黒っぽい雲に覆われていた。3 階のパノラマ展望風呂からは右手東側には両津湾も見えている。

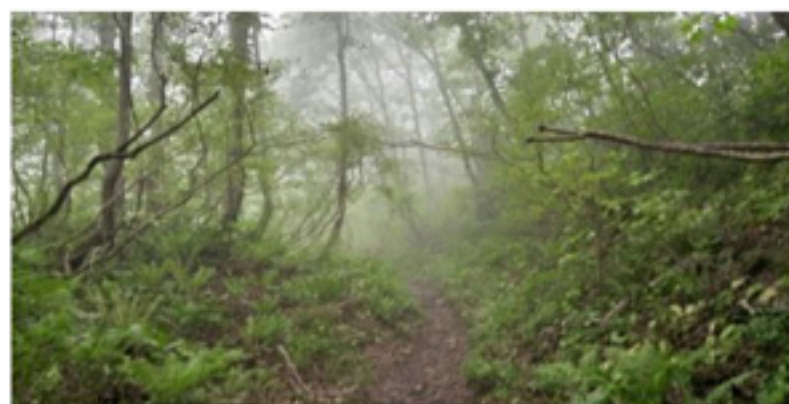
夕食は部屋でとのこと、山登りの時にこんな宿に泊まるのは初めてだ。奥さん孝行としては良かった。ごちそうはカニなどやデザート柿のシャーベットなど 10 品以上あり、妻も頑張っほとんど食べた。自分は普段夜は食べないことにしているごはんも明日の登山のために食べて、おなかを壊す心配をしたほどだ。

5 月 28 日 (土)

5 時起床。パノラマ展望風呂から見ると全体的には晴れているが大佐渡山地の上部は黒っぽい雲に覆われて動きが速い。

大広間での朝食を済ませ、6:45 旅館発、海拔数メートルの加茂湖岸の草木が風で動いている。稜線の風の強さが心配だ。

風よけのためにカッパの上着を着けて、ドンデン山荘を 7:40 発。すでに何組かは出発したようだ。7~8 人の若者グループがワイワイと話しながら準備をしていた。案内標識に従い下り気味の舗装路を歩く。風が少し強いが晴れ間があるので良い山行になりそうだと期待する。



金北山縦走路入口(写真上左)を 8 時に通過し山に入っていく。緩やかなアップダウンを繰り返し、アオネバ十字路からはだんだん登りになってきて、霧の中に入り込んだようだ(写真上右)。

紫のシラネアオイやカタクリ、白いチュウリップの花を小さくし花卉を細くたようなアマナ、いずれも湿りでおれ気味でもかわいい。ピンクのイワカガミは色の濃いものと白っぽいものがある(写真次頁左右)。ヤマツツジが最盛

期だった（写真右下）。



エンレイソウもあった。ヤマシャクヤクの白い花がたくさん落ちていた。さすが「花の百名山」だ。

雨になり、カッパのズボンも着ける。稜線近くになると風が強くなり木々がざわめいてくる。ガイドブックでは好展望と記されている



マトネの山頂からはガスで何も見えず、風が強くてゆっくり休む気にもならない。さらに進むと5～6グループが引き返してきた。風に飛ばされて2回転んだと話す若者。突風の中に突入していったのは若者5人のグループだけだなどと話していた。

山荘の人に教えてもらったのは、風を遮り、弱くする樹木や灌木のない、または少ない「ツンプリ平」と「天狗の休場」の間が要注意とのこと。トレッキングマップの所要時間では1時間15分。逆に言えば1時間半ぐらい我慢して進めば通過は可能と考えた。山荘の人は、この場所は風で飛ばされても滑落するような場所はないとも言っていた。

後で下山後に聞いたら妻は初めから引き返すものだと思っていたらしいが、見通しが30メートル未満の風の強い中でまともに話ができる状況ではなかったため、とにかく行けるところまで行ってみることにした。ツンプリ平から先、初めのうちは10分おきくらいに背丈を越える灌木の茂みがあったので、「風を突っ切って茂みで休む」を3～4回くりかえしたが、いよいよ草も茂みも生えてないところで物凄い強さの風になり歩ける状態でなくなった。風速20mは越えていただろう。飛ばされる危険を感じて自分が風下に回り妻の腕をつかんで体を風の方角に倒して少し弱くなるまで踏ん張った。2回危ない目に遇った。風が少し弱くなり歩けるようになったら妻から「腕を離してよ」とぶっきらぼうに言われた。下山後の話で、腕を組んだのは何十年ぶりだろうと笑いあった。

何とか風よけとなる小灌木帯の天狗の休場にたどり着いたときは正直ほっとした。長めに休み水分とエネルギーを補給した。「天狗の休場」の名前の由来が

身に染みて理解できた。

緩やかに登っていくと分岐に達するが、左側の先には吹き溜まりの黒っぽくなった雪が見えたので進まず右手に進む。雪が解けて間もないためかぬかるんでい



て歩きにくい。あやめ池はけっこう大きな池で幻想的だ（写真左）。

山頂が近いはずなのに池があるのは不思議な感じだ。山頂直下にはまだ雪が残っていた。急な道を、足元を確かめながら進み、

ふと見上げると突然大きく場違いな人工物が現われてドキッとした。航空自衛隊の通信施設だ（写真右）。



施設にはさまれて金北山神社がありここが山頂だった。12:55着。ドンデン山荘から5時間かかった。神社の前で写真を撮る（写真左）。

妻は疲れて神社の階段にへたり込んでいる。眺望もな

いので15分ほど休んで下山にかかる。防衛省管理の一部舗装された道路を下る。花があるわけでもなくただただ下る。15時前に白雲台に着きそうなので

16:30発のバスの予約を取り消し、同じ会社のタクシーを頼む。白雲台に近くなったら風もなくなり晴れてきた。おそらく下界は一日晴れていたのだろう。

両津港を経由してドンデン山荘に16時前に着くことができた。風呂上がりのビールはおいしかった。夕食はバイキング方式だったが利き腕の手にビニールの手袋をするという感染対策だった。県民割のクーポン券で佐渡の地酒いただく。旨い。パネルをはさんだ隣のご夫婦は福島県の人だった。風の強かったことなどを話し地図でその区間などをアドバイスした。



5月29日（日）

天気は良かったがドンデン山荘（標高 890m）周辺では前日より風があり縦走路はどうだろうかと思いをめぐらす。



午前中を観光にあてた。ドンデン山荘に向かう道路わきに看板の出ていた日蓮上人（※）の立像（写真左）を訪ね、両津湾と加茂湖に挟まれた湊地区の北一輝の生家を見、椎崎諏訪神社の展望の丘から加茂湖と大佐渡山地の山並みを眺め、トキの森公園を散策した。

（※）佐渡日蓮聖人大銅像

「日蓮宗開宗 750 年慶讃事業」、全国 3,000 を超える僧侶・信徒の協力で建てられた銅像。両津湾を背に釈迦の生まれたインドの方角に向かって建つ姿は、高さ約 13m、台座を含むと 26m。ゆかりの地・佐渡にふさわしい威厳に満ちた姿でそびえ立ちます。世界一大きい日蓮像。（佐渡観光ナビ）平成 15（2003）年建立。日蓮は流刑地佐渡には 1271 年 10 月から 2 年 5 カ月滞在。

両津港を予定通り 12:40 出航し、船上から大佐渡山地を見納めする（写真下）



令和4年6月 NO108 アンチ・エイジング 山旅遊人